

令和元年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム・閉会の辞

著者	木村 清孝
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	25
ページ	65-66
発行年	2020-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1646/00000860/



閉会の辞

鶴見大学仏教文化研究所特別顧問 木村 清孝

本日は石川素道禪師様の百回御遠忌にちなみ、シンポジウムを開かせていただきましたところ、多くの皆様にお集まりいただき、まことにありがとうございます。先ほど、山口老師の方からご紹介がありました御正當の大遠忌に向けて、とてもよい助走になったのではないかと思います。今日の先生方のお話を通して、石川禪師様の御人柄とか、御活躍の様子とかを、まだほんやりとではありましようけれども、窺い知っていたのではないでしようか。私も、禪師様が非常に多面的なお力をお持ちの、スケールの大きなお方だったことを改めて強く感じさせていただきました。

また、とくに印象を受けたことは、御授戒のことです。いま宗門が置かれている社会的な位置、あるいは御本山のありようといったものに関連して思うことは、近世以降、御授戒が本当に大事にされてきた。ところが現在、とくに地方では、この御授戒を行うことがとても難しくなってきた、ということだと思います。これには、いろいろな事情が関係しているでしようが、こういう状況にどのように対処していくべきなのか。この問題をしっかりと考えなくてはならないのではないかと思っただ次第です。

それともう一つ、今日のお話には直接には出てきませんでしたが、石川禪師様が断行された御本山の移転と

いう事実は大きな歴史的な意義があります。この事態をめぐって、禪師様の御苦勞は大変なものだったと想像されます。そして、このことに思いが至るとき、反転して、これから両大本山をどのように守り、発展させていくのか、また、宗門全体の中で祖院をどう位置づけるのがよいのか。——このことも、宗門人の一人として、宗門を支えてくださっている皆さんのお気持ちを汲みながら、しっかりと考えていかなくはならないと自覚させられました。

本日は先生方、長時間にわたりまして、お疲れさまでした。また会場の皆さま、遅くまでご聴講、ありがとうございます。